

# AR CA DIA

Okazaki City Museum News

岡崎市美術博物館ニュース  
[アルカディア]

61  
SUMMER 2014



  
OKAZAKI  
MINDSCAPE  
MUSEUM

岡崎市美術博物館

# 眼の極楽⑫ 江戸の花園

館長 榊原悟

## 青柳の糸

柳に雪を積もらせる―サントリー美術館本『酒伝童子絵巻』において、狩野元信が試みた童子の館の冬の庭の表現である。もとより雪こそが、それ一つでさえ冬を知らしめるに充分なしるしであるからだ。だがその雪を積もらせた木が柳であった点は注目に値する。

それというのも「酒伝童子絵」には多くの異本が伝わるが、その四季の庭の冬に雪の積もる柳をあてた例は他にないからだ。例えば『大江山酒典童子絵巻』（六巻本 水戸徳川家旧蔵）。落款印章はないものの、頭部の大きい特異な人物表現から、筆者は江戸初期の狩野派の絵師勝田竹翁（狩野長信門人 参州加茂郡の人）の可能性が高い。その童子の四季の庭の描写は料紙数枚に及び、絵師が最も構想力を傾けて描いたとみられるのだが、その冬の情景にさえ雪積もる柳を見ることはない。

しかもサントリー本の詞書には、雪積もる柳に対応する文言がない。となるとこの柳の描写はあくまで絵師元信が独自にしたもので、そこに彼の凝らした趣向を見ることも満更不可能ではあるまい。雪の柳もやがては芽吹く―そこに季節の移ろいを象徴しようとしたのではなかったか。現に「雪に柳」を描いた数少ない作例の一つ『四季柳図屏風』（長谷川等伯の款印あり 梅林寺蔵）でも、雪の柳と共に三本の柳を並列させることで、春夏秋冬、移りゆく季節を表現したからである。

加えてサントリー本では、その雪の柳のかたわらで秋草が咲き乱れ、梅や藤が匂う。まさしく「春夏秋冬あることなし」（『往生要集』）―童子の館のこの世ならぬ異界性の表現はここに尽きる、と称してよいだろう。

気付いて欲しいのは、その表現を成り立たせるに当って、時間性を含んだ「雪に柳」が実に効果的であったという点である。だがいずれにせよ、雪の柳が異例異相であることは間違いない。

どうしてか。むろんわたしたちが柳と雪との組合せを異様と感じるからである。

## ESSAY

さらに言えば、柳は冬の木ではない、そう断じるころささえあるだろう。

だが、ちよつと考えれば、これは可笑しな話だ。柳はいつも其処に、わたしたちの身近に植わっているのではないか。其処に雪が降れば、当然、柳にも積もるはずだ。にもかかわらず、わたしたちは柳に雪を積もらせた描写を変だと思う。いや、そう思うこと自体を変だとは露ほども疑わないのに、だ。そこには柳とわたしたち日本人との長いつき合いの歴史があったからだろう。むろんここでの歴史の語を文化と置き換えてもいだろう。ではその文化とは…。

一体、柳と言えば、むかし恋しい銀座の柳か、ちよつと訳知りならば、吉原の見返り柳を言う人もいるだろうが、わたしたちがまず思い浮かべるのは、土手の柳が川風に揺れる、その涼し気な姿であるに違いない。川面を渡る風が心地よい。となれば季節は夏か。だがそう、結論を急ぐこともあるまい。わたしたちは必ずしも柳を夏の木だとは思っていないかつたふしもあるからだ。

ところでこの柳、もはや日本人の生活と風土にすっかり溶け込んだ感があるため意外と思われるだろうが、そもそもは帰化植物であつたらしく、その詳細は不明ながら古い時代に中国から渡来したという（松田修著『古典植物辞典』 講談社学術文庫 一九五八年）。しかし早くに日本の風土に馴染んだよう、『万葉集』巻十に「柳を詠む」として既に八首が録られている。のちに蕪村が、

さし木とも見へず成ける柳哉

と詠んだように挿木でも殖える栽培の簡便さと成長の速さが、柳の日本への帰化を促したのだろう。

いや、それだけではあるまい。栽培の容易さなど二の次だ。まずは柳そのもの、その風姿がわたしたちの先祖の眼を魅了したこと、これこそが柳の栽培が広まった最大の要因であろう。『万葉集』に載る八首もの歌が、何よりそれを物語る。

浅緑 染め掛けたりと見るまでに

春の柳は萌えにけるかも

もしきの大宮人のかづらける

しだり柳は見れど飽かぬかも

これによれば、わが万葉人たちの眼を奪ったのは、しだり柳の細しく、しなやかな枝振りであり、それが春の訪れとともに萌え出づる、その様であった。万葉人は、それを糸になぞらえ、「青柳の糸」なる美しい言葉まで生み出した。鬢(頭髪に巻いた飾り)にもしたという。そんな柳が広く栽培されるようになるのは当然。実際、柳は、京都では、

見渡せば柳桜をこきまぜて

都ぞ春の錦なりける

素性

この歌が単なる修辞ではない程に、其処此処に植えられていたのだろう。「緑柳紅桜」(菅原道真「菅家文章」)の織りなす錦の美しさこそ都の春であった。そうした「青柳の糸」は、そこに宿る春雨や白露と取合せられることで、

青柳の枝に懸かれる春雨は

糸もて貫ける玉かとぞ見る

伊勢

浅緑いとよりかけて白露を

珠にもぬける春の柳か

遍昭

と、さらに一層その美しさが研ぎ澄まされる。一瞬のきらめきを捉えた歌人たちの眼は鋭い。

見逃してはならないのは、そうした歌人たちの眼を通して、わたしたちの柳を見る眼も育てられてきた点である。「青柳の糸」の一語にそれが集約された、とみてよいだろう。

つまり「青柳の糸」こそは、柳の典型。その美もこれに尽きたる。むろん、その季節は春。これがわたしたちの柳をめぐる文化だ。その柳に雪が積もるのを異様と感じる、これもまた文化であった。

しかし、ことは柳で済むわけではない。前回、提示した童子の四季の庭に咲き乱れる草花たち。そこにも同様の事情があったはずだ。わたしたちは、梅も桜も、そして楓も、それが最もそれらしく見えるかたちⅡ典型を以て、それらを認識する。花木ならば、それらが咲いた姿、楓ならば紅葉した姿である。四季性を担保するのは、そ

## ESSAY

これらの草花の典型においてであった。と述べると、

花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは 雨に對ひて月を恋ひ 垂れこめて春の行衛知らぬも なほ あはれに情深し 咲きぬべきほどの梢 散し萎れたる庭などこそ 見所多けれ(『徒然草』)

との反論も出るかも知れない。確かに兼好法師の言も一理ある。だがそれも「花は盛りに、月は隈なきを見るべき」との前提があつてのものであろう。満開の桜を、満月のもとで見るのがいいに決っているではないか。それが人情である。

仏とは桜の花に月夜哉

其角のこの句も、満開満月をよしとする気持ちがあつたればこそである。

有難いのは、万葉以来のそうした歌のころ、その眼が選びぬいた季節にちなむ花と鳥とを集大成してくれていることだ。むろん、それらのあるべきかたち(典型)においてである。それをなしたのは、藤原定家(二六二〜二四二)。言うまでもなく『新古今和歌集』の撰者。わが国最高の歌学者でもある。その定家が、十二ヶ月にちなむ花と鳥を挙げ、歌を詠んだ。「定家詠月次花鳥和歌」と呼ぶ(『拾遺愚草』所収)。ここにみる花と鳥こそ季節を代表する。当然のごとく定家は柳も選んでいる。春一番、正月の花としてである(図)。

正月 柳

うちなびき春くる風の色なれや

日をへてそむる青柳の糸

ここでもやはり歌うのは「青柳の糸」。ただしなお芽吹いてないようだ。では定家は他に、どんな花と鳥を採っているのだろうか。(続く)



「柳に鶯図」住吉具慶筆「定家詠月次花鳥和歌図屏風」(高津古文化会館蔵)より

まず、訂正とお詫びからはじめないといけません。前号四頁でこの展覧会の紹介文を書きましたが、そこで誤りがございました。

①中段一九行目

誤・Aは「大高檀紙」という…

正・Bは「大高檀紙」という…

②中段二五行目

誤・つまりAは…

正・つまりBは…

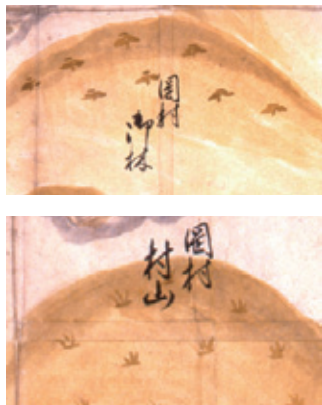
拙文をしつかりお読みいただいていることに感謝するとともに、それにもかかわらず誤りをしてしまったことに、深くお詫び申し上げます。

さて本展では、古文書を中心に歴史資料約二〇点を展示しています。足利尊氏・徳川家康ら歴史を彩る人物から庶民に至るまで、また時代も戦国から江戸時代を中心に、鎌倉から明治まで幅広い古文書を出品しています。古文書は「読めないから…」と敬遠されがちですが、読めなくても楽しむポイントはたくさんあります。本展では古文書の内容だけでなく色や形、花押などにも注目し、多様な側面から古文書を展示しています。

ただ、それゆえに展示の解説書きでは苦勞しました。今回は形に注目して

いるから、その点について詳しく書きたい！一方で内容についても記さない訳にはいかないし…。けど長くなると読んでいただけない…。そういう具合で泣く泣く書くのを諦めたこともあります。その二つをここに挙げてみようと思います。

今回江戸時代の水をめぐる争いの資料、荒巻水論絵図を展示しています。水利用の仕方を色分けして図示したのですが、少し視点を変えて山を見てみると、その描かれ方に違いがあることがわかります。次の2つを見てください。



上が岡崎藩の所有する山「御林」、下が村の山です。御林は木（恐らくマツ）が描かれているのに対して、村山は柴草が描かれています。藩は燃料や建築資材となる立木を必要としていたため、植林もしながら木の生えた山を

## EXHIBITION

管理しています。一方村人たちは飼肥料確保のため、草山となるよう維持していました。もちろん村山でも木が生えた山も存在しており、きちんと描き分けられています。もともと江戸時代は、全ての山が現代のように鬱蒼と茂っていたわけではありませんでした。そうした茂り



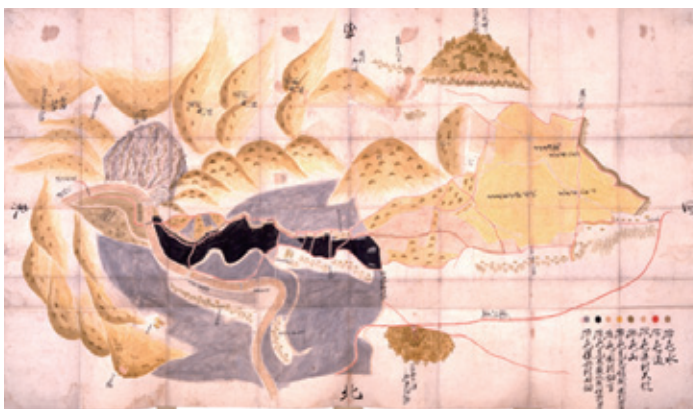
方の違いもこの絵図には表されています。岡崎の氏神を祀る神明社の宮山は、上図のように木が稠密に描かれています。

宮山が守られ、神明社が村人に尊崇されていたことが分かります。一方で村山などは頻繁に利用され、立木はまばらだったことがうかがえます。このように一つの資料でも視点を変えると、全く違った情報を引き出すことができるのです。

もちろんこのほかの資料にも、まだまだ伝えきれない魅力がたくさん詰まっています。一人でも多くの方にその魅力を伝えられるよう、様々な方法を試みている毎日です。

## 収蔵品展 古文書 みりよく発見！

湯谷翔悟



荒巻水論絵図 江戸時代後期 個人蔵

会期：平成26年6月14日(土)～7月27日(日)

企画展

# 法隆寺展

—聖徳太子と平和への祈り—

浦野加穂子



法隆寺は推古十五年（六〇七）、奈良斑鳩の地に推古天皇と聖徳太子によって開かれたと伝えられます。二〇二二年の聖徳太子一四〇〇年御遠忌に向けて開催する本展では、「聖徳太子信仰」「平和への祈り」をテーマに法隆寺・聖徳太子ゆかりの宝物を一堂に公開します。第一章では、やさしいほほ笑みが平和へのメッセージを感じさせる国宝「観音菩薩立像（夢違観音）」をはじめ、法隆寺が創建された飛鳥時代後期（白鳳期）の仏像を紹介します。第二章では「日本仏教の祖」として広く信仰されている聖徳太子の様々な姿をあらわした彫刻・絵画の名品を展示し、その偉大な足跡をたどります。そして第三章では、太子信仰の広がりを、古来三河で盛んな浄土真宗との関わりの中から取り上げます。

古代日本に登場した聖徳太子（五七四―六二二）は、推古天皇の摂政として手腕をふるい、『十七条憲法』などにみられるように「和」の精神を説いて新しい政治を推進しました。また遣隋使を

## EXHIBITION

派遣して外交をおこない、当時の先進的な学問であった仏教を積極的に導入し、仏法による平和をもたらし、数多くの寺院を建立するなど、その普及に尽力しました。このため太子は「和国の教主（日本の釈迦）」とも称され、宗派をこえて「日本仏教の祖」として崇敬されています。『日本書紀』にみられるように、太子は七世紀後半には聖人として崇められており、十世紀に成立した『聖徳太子伝暦』により理想化され、超人的な存在に高められました。『伝暦』が後世の人々に与えた影響は大きく、鎌倉時代『伝暦』に代表される太子信仰を背景に、親鸞は聖徳太子の建立と伝わる京都の六角堂に参籠し、太子の本地とされる救世観音の夢告を受けました。その後親鸞は法然のもとに赴いて専修念仏の教えに帰依し、これが浄土真宗の端緒となりました。親鸞は聖徳太子を深く敬い、太子像を祀り、その徳を称える『皇太子聖徳奉賛』などの多くの和讃や、太子伝である『上宮太子御記』を著しました。門弟たちも太子を礼拝し、初期真宗の本尊として用いられた「光明本尊」にも「和国の教主」として聖徳太子が描かれており、また手に柄香炉と笏を持つ「真俗二諦像」と称される孝養像などが流布しました。

第三章「三河における太子信仰」は当館が独自に企画した展示です。岡崎市を中心とする西三河は古来浄土真宗の盛んな地域で、満性寺の「聖徳太子立像（二歳像）」や本證寺の「聖徳太子絵伝」をはじめ、三河の真宗寺院には鎌倉時代に遡る聖徳太子像や太子絵伝などが伝来しており、古くから太子信仰が盛んであったことが窺われます。また中世成立の善光寺如来、聖徳太子、親鸞聖人などの絵伝も数多く伝えられており、これらは仏教伝来から親鸞に至る真宗の歴史を图示したもので、内容を解説する絵解きなどを通して、真宗そして太子信仰の広がりに大きな役割を果たしました。本章では三河の浄土真宗における篤い太子信仰を示す文化財を中心に展示し、仏教を通して聖徳太子が目指した平和がどのようなかたちで伝えられ、太子信仰が全国そして三河へと広がっていったかをたどります。

全国で今も続く太子信仰。本展を通して多くの皆様に太子の説いた「和」の精神に触れて頂き、これが受け継がれ、さらに未来へ繋がっていく一助となれば幸いです。

幸いです。

会期：平成26年8月9日（土）～9月21日（日）

## 法隆寺番外編①

法隆寺と徳川家康

堀江登志実

今回の法隆寺展では、法隆寺と徳川家との関係を紹介するコーナーがある。岡崎で法隆寺展を開催するからには家康との関係を示すものがあつてもいいのではないかと判断である。慶長十九年(六一四)十一月十六日、大坂冬の陣の直前、家康は法隆寺を参拝し、聖徳太子が物部守屋を討伐した時に使つたとされる梓弓と矢を拝し、戦勝祈願をした。豊臣氏との戦いを前に聖徳太子の功績にあやかろうとしたのであろう。このとき、家康は、剣銘「信国」、桐紋轡などを法隆寺に奉納している。それらの二連の奉納品は今回の展示に出品される。法隆寺に参拝した家康は、その晩、子院の阿弥陀院に泊まった。その時、阿弥陀院の学僧の実秀は家康より六字名号を拝領した。その名号も今回の展覧会に出品される。この名号は三河の大樹寺十三世登誉が書いたものである。登誉という一厭離穢土、欣求浄土」の経文を家康に授け、若き日の家康を救つた逸話で有名である。家康は生涯、その恩を忘れず、登誉自筆の一書を保持していたのであろう。



家康画像 法隆寺蔵

本書は「南無阿弥陀仏」の下に登誉の署名、両脇に無量寿経の一節が記される。その無量寿経の一節「日月清明、風雨以時、災厲不起、」は寺院の棟札の文言にもよくみられるものでなじみがあるが、浄土宗寺院では太平を祈り、年頭の修正会など諸行事で唱えられるという。豊臣氏との対戦を前にした齢七十三歳の家康、天下泰平への最期の詰めであることを意識して臨んだであろう。法隆寺への戦勝祈願により、家康は冬の陣、さらには翌年の夏の陣にも勝利を納め、江戸時代の泰平への道筋をつけることになる。法隆寺は江戸時代を通じて徳川家の庇護を受ける。二代将軍秀忠は元和三年(六一七)、法隆寺に千石の領地を安堵する。その石高は将軍家菩提寺大樹寺の寺領高六一六石よりも多い。

## COLUMN & TOPIC

## 法隆寺番外編②

瓦からみた法隆寺

内藤高玲

法隆寺と言えば、飛鳥時代から現代にいたるまで法灯を灯し続けている日本を代表するお寺です。様々な記録類にも出てきますが、明治二〇年頃から活発に論議されるようになったのが、「法隆寺再建非再建論争」です。日本書記によれば、六七〇年に焼失したという記録が残されており、旧伽藍の心柱も残されていました。詳細は他の本等で調べていただくとして、当時の一流の建築史家や文献史家の間で激しい論争が交わされました。その論争に決着をつけたのが岡崎市出身の仏教考古学者石田茂作氏です。昭和十四年(一九三九)に実施した発掘調査により、現在の伽藍よりも古い伽藍が存在していたことを突き止めたのです。現在の伽藍は西院伽藍、焼失以前の伽藍は若草伽藍と呼ばれています。発掘された若草伽藍からは日本最古の本格的寺院である飛鳥寺で使用された瓦と同じ氈(木型)を削りなおして使用した瓦も出土しており、飛鳥寺の造営に関わった工人たちが若草伽藍の創建にも携わっていたということがわかっています。この当時、瓦を屋根に

葺くということは最新の技術であり、宮もしくは寺などの特別な建物にしか使用されませんでした。仏教の地方への広がりとともにその技術も地方へ広がっていくのですが、まず始めは飛鳥から、そして斑鳩へとその技術が伝播したことをこのことが示しています。今回の展示では、飛鳥寺から伝わった氈を使用した若草伽藍の瓦、斑鳩の宮で使用された瓦、そして再建された後に使用された西院伽藍の瓦を同時に見ることが出来ます。瓦という二建築部材に過ぎず、今もほぼ変わらない形態で使用されているのでどうしても地味なイメージを抱きがちですが、実はその文様などを研究し、様々なことを知る事が可能です。その方法をわかりやすい形で提示するのが石田氏です。現代でもお寺の瓦には文様がありますが、飛鳥時代から現代までそれが引き続いており、今もそれが使われていることも多いです。そんなことを知った上で瓦を見ていただくとよりいっそう興味が湧いてくると思います。

昨夏当館で開催した「ユーモアと飛躍 そこにふれる」展関連企画「妄想の空間を連結しよう！」に参加された鋤柄ふくみさんの個展が、市内ギャラリーで開催された。

壊れたドア枠とその向こうにある不安定な椅子。二つの間を、雑誌の切り抜きを貼り合わせて着色したおどろおどろしい長い紙の帯

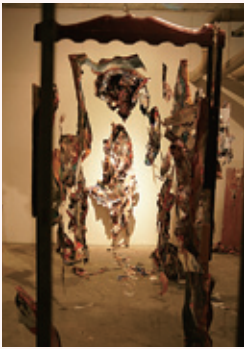
がつなぐ。「妄想展」では、椅子の背枠に向かって渦を巻いているかのようになり求心的で凝縮していた造形は、今回の個展では、奥の壁に向かって引き伸ばされ、解体され、分節化された各部が暗いギャラリー地階スペースを浮遊している。その空間内のあちらこちらに配された「小さな者たち」。これらは、欠損のある身体であったり、奇形の人体であったりするが、手のなかに納まるほど小さいからか、作家の手元に常時置かれている私的なものが多いからか、オブリジェと呼ぶにはあまりにも愛おしい。

一階の壁面には時間をかけて絵具を塗り重ねたであろう絵画が並ぶ。人物を含む様々な事物が、それぞれの形を保った状態で、平らなカン

ヴァスの奥に広がる絵画空間内に前後に位置取りをしながら配されている。その絵画構造によって、画面には、非常に求心的かつ急進的な奥行きが生まれており、時折用いられる額縁のような枠も、外界から画面を限定し、絵画の中に広がる空間の深度を強めているようである。

厚みのある絵具の「筆」筆は、画面を掻き分けながら進んでいく作家の姿を想起させ、着色した紙で制作された頭部のような立体は、あたかも絵画平面に顔をうずめてきたへこみのようにも見える。それは絵画の奥に潜りたいと述べる作家の心情を反映しており、地階の「奥絵」のあり様は、絵画の内部に身を置いたような状態にも例えられよう。

絵画という平面を越えよう、いや、潜り抜けようとする作家の思いが体现された展示であった。



マサヨシスズキギャラリー展示風景

## COLUMN & TOPIC

第三回目になる年間バスポート購入者限定イベント。今回は「藤井達吉の全貌展」に関連したイベントでした。初夏の気持ちのよい晴れ間の中、碧南市藤井達吉現代美術館と九重みりん時代館・みりん工場を巡る、小旅行気分のツアーです。

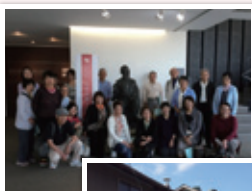
バスに揺られること1時間で、碧南市に到着。最初に向かった藤井達吉現代美術館の常設展では、当館の展覧会では少数であった藤井達吉の晩年の作品を観覧できるなど、当館の展覧会から発展して楽しむことができました。当時の企画展「小原和紙工芸展」では、紙製とは思えないような造形的な作品や、和紙の特性を活かした美しい作品が展示されていました。工芸家の方

直々に説明をいただくことができ、学芸員とはまた違う視点での解説に皆様満足いただけただけように思います。

次に向かったのは九重みりん時代館です。大浜の海辺の情緒あふれる街並みを眺めながら歩きました。到着するや否や、渡されたのは工場見学用のキャップでした。全員でシャワーキャップのように被って、い

ざ出陣。九重みりん時代館では、普段あまり接する機会のないみりんの歴史を学びました。「味噌」の漢字は、かつて「美醢」であったそう。そんな豆知識のような歴史を知ることができた興味深い見学でした。続いてみりん蔵を見学しました。文化財である蔵には、建築関係の方も多く訪れるそうです。古くから伝わる伝統的な工法を目にすることができ、貴重な経験となりました。

今回は、法隆寺展に関連したイベントを予定しています。「法隆寺展」を二〇%楽しんでいただけるようなイベントになることとしたいと思いますので、ぜひご参加ください。最後になりましたが、関係各所ならびに参加者の皆様に心より御礼申し上げます。



# INFORMATION

## 法隆寺展

8月9日(土)～9月21日(日)

### ■講演会

8月9日(土)「聖徳太子の精神と和の心」

講師：大野玄妙師(法隆寺管長)

9月7日(日)「白鳳のほほえみー飛鳥時代後期の彫刻についてー」

講師：岩田茂樹氏(奈良国立博物館学芸部 首席研究員)

いずれも午後2時～

### ■バスツアー「三河における太子信仰ー聖徳太子ゆかりの三河真宗寺院を訪ねるー」

8月24日(日) 午前10時～午後3時30分[雨天決行]

コース：当館出発→妙源寺(岡崎市)→本證寺(安城市)→満性寺(岡崎市)→当館着

定員：30名(応募多数の場合は抽選) 参加費無料

申込方法：往復はがきの「往信用裏面」に①イベント名②参加者全員(4人まで)の郵便番号・住所・氏名(ふりがな)・年齢・電話番号、「返信用表面」に代表者の

郵便番号・住所・氏名を明記の上、岡崎市美術館「バスツアー」係までお申込みください(8月1日(金)必着)。

### ■学芸員によるこども向け展示説明会

「夏休みこども教室 聖徳太子を知ろう！」

8月17日(日)、8月27日(水) 午後2時～

対象：小学4～6年生(保護者の同伴可)

参加費無料(ただし保護者は展示室入場の際に、展覧会観覧チケットが必要)

### ■学芸員による展示説明会

8月30日(土)、9月13日(土) 午後2時～

参加費無料(ただし、当日の観覧チケットが必要)

■当館館長 榎原悟著「狩野探幽：御用絵師の肖像」が、臨川書店より出版されました。

## 「身近な歴史」

歴史というと、カタイ・オタクっぽいという身近ではないイメージがあるように思う。しかし私は、歴史はとつても身近でわくわくするものだと思う。

私の九二歳の曾祖母の話を知ると、歴史を身近に感じられる。例えば、曾祖母の祖父は近衛兵として岐阜から東京に出稼ぎに出ていた。「近衛兵」といえば、歴史の教科書の用語だが、自分の先祖の話となるとそんな用語が現実味を帯びてくる。他にも歴史を身近に感じられるような、祖母が疎開した話、終戦時の話などとても興味深い。

さて、私は大学時代に文化史学専攻だった。基礎知識として「現代の問題を見つめるには、必ず過去を振り返る必要がある。そのために歴史研究は重要だ。」と学んだ。

曾祖母の話を知り、今、今の自分の生活や日本の将来などを考えるきっかけになる。そういう意味では、曾祖母の経験自体が、学問とは言えないが立派な小さな歴史ではないかと思う。自分の生きてきた数十年だって、ひとつの歴史であると考えれば毎日楽しくなる。自己流な捉え方だが、このように歴史は身近なものだと考えている。また、展覧会で展示物を実際に見ることも、歴史を身近に感じられると思う。次回「法隆寺展」をはじめ、美博の展覧会にぜひお越しください。(鈴)

## 「青春の山」

「芸術という部門が、市役所の中にもしっかりとあるんだ。」というのが、一年半前私が美術博物館に異動したときの率直な感想である。

芸術とは縁もゆかりもない者だが、音楽だけは何故か中学生の頃からどんと入り込んで行ってしまった。モーツァルトが特に良い。耳に心地よい音楽が聞こえてくると何となく楽しくなってくる。

私の昔の趣味の一つに山登りがある。山は深く厳しく暖かく迎えてくれる。テントの中で縮こまりながら、仲間と音楽の話や延々と喋っていた。脇には必ずウイスキー。今から三〇～四〇年近くも昔の話である。

誰しもそうだろうが、趣味というものにはより深く過激な方向に進んでいく。夏山をやり、秋の寒い溪流で沢登りを行い、冬山にも挑戦し、最後の行きつく先はロッククライミングになる。剣沢からの日替わりルートでの剣岳のピークを目指す。伊那谷の滝登り、正月の槍ヶ岳、こんなことやっていると、その内死んでしまおう、と思いつつザイルを握っていた。かろうじて今生きているのは、子どもが出来たためといえる。

山は私の青春そのもの、中央道や松本辺りを走っていると、ついつい山の方に目が行ってしまう。(寄)

## おしゃべり、あれこれ。

編集後記 | 「法隆寺展」の開催にあわせて、今号では番外編として二つのお話を紹介しています。「日本建築史」を創始した伊藤忠太は、1893年の著作「法隆寺建築論」のなかで、法隆寺に遠くギリシア古典建築との類似を認め、これを東西交流の証として高く評価しました。法隆寺にまつわる話は尽きません。この度の展覧会を機に再発見していただければと思います。(千葉)

表紙図版：国宝「観音菩薩立像(夢違観音)」飛鳥時代 法隆寺藏



開館時間 午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日 月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後の休日でない日)

年末年始 ※展示替えのため臨時休館する事があります。

[岡崎市美術館ニュース/アルカディア] 第61号 2014年7月発行

編集・発行 岡崎市美術館(マインドスケープ・ミュージアム)

〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町峠1 岡崎中央総合公園内

TEL.0564-28-5000(代表)